

第8回杜甫学会シンポジウム資料

国語教材としての杜甫の古体詩

於横浜国立大学教育学部6号館

二〇二四年九月六日一四時五〇分

担当：大橋賢一（北海道教育大学旭川校）

発表の流れ…

はじめに―本発表のねらい

Ⅰ 現在の古詩教材とそれらの教材としての可能性

Ⅱ これまでの古詩教材―現代の教材としての再提案

Ⅲ 杜甫の古詩が持つ教材としての可能性

まとめ

はじめに―本発表のねらい

Ⅰ 現在の古詩教材とそれらの教材としての可能性

現在採用されている杜甫の古詩

①石壕吏（四社七点） Ⅱ数研・東京書籍・筑摩書房

大修館（古典探究・精選古典探究）・第一学習社（古典探究・精選古典探究）

②兵車行（三社三点） Ⅱ桐原・三省堂・明治

i 徴兵の詩―「石壕吏」の検討

現行の教科書―筑摩書房の場合

石壕吏（陝縣有石壕鎮） 杜甫

1 暮投石壕村，有吏夜捉人。老翁踰牆走，老婦出門看。

5 吏呼一何怒，婦啼一何苦。聽婦前致詞，三男鄴城戍。

9 一男附書致，二男新戰死。存者且偷生，死者長已矣。

13 室中更無人，惟有乳下孫。有孫母未去，出入無完裙。

17 老嫗力雖衰，請從吏夜歸。急應河陽役，猶得備晨炊。

21 夜久語聲絕，如聞泣幽咽。天明登前途，獨與老翁別。

『全唐詩』卷二二七

●理解 ● 「石壕吏」の詩で、作者が訴えたかったことは何か、話し合いなさい。

●表現 ●

(1)それぞれの詩について、作者の心情を想像しながら朗読しなさい。

(2)それぞれの詩について、一句の字数・句数・押韻を確認しなさい。

(3)それぞれの詩について、特徴的な語や表現を抜き出して、その効果を考えなさい。

◎提案できること

どのような力を身につけさせたいか↓

何を詠じているか（内容レベル）・どのように詠じているか（表現レベル）

考え方の手立て・順番・表現レベル↓内容レベル という手続きの踏み方の妥当性

近体詩との比較の観点から考察

■反復（リフレイン）に着目■

●「有吏」「従吏」（2・18）

●「老翁」（3・24）「老婦」「老嫗」（4・17）「婦」（6・7）、

●「一何」「二何」（5・6）

●「三男」「一男」「二男」（8・9・10）

●「存者」「死者」（11・12）

●「乳下孫」「孫」（14・15）

近体詩⇨原則として同一の文字を用いない ⇨ 古体詩⇨用語については自由  
問…なぜ近体詩は同一の文字を使わないのを原則とするのか⇨修辭的な利点  
問…本詩における「反復」の効果は

■「老婦」と「老嫗」の区別の理由を考える―地の文と会話文■

「老婦」⇨語り手からの呼称

「老嫗」⇨老婦自身による自称⇨直接話法⇨作者自身がこの場面に居合わせたことを伝える要素

このように考えられる根拠…①同じ意味だが表現上の区別がある ②七句目「致詞」から二〇句目までが「老婦」のことばと考えられる

↓語り手が現場に確かにいた、という生々しさの演出

ii 徴兵の詩―「兵車行」の検討

- 1 車麟麟，馬蕭蕭，行人弓箭各在腰。
- 4 耶娘妻子走相送，塵埃不見咸陽橋。牽衣頓足闌道哭，哭聲直上干雲霄。
- 8 道傍過者問行人，行人但云點行頻。或從十五北防河，便至四十西營田。
- 12 去時里正與裏頭，歸來頭白還戍邊。邊亭流血成海水，武皇開邊意未已。
- 16 君不聞漢家山東二百州，千村萬落生荆杞。縱有健婦把鋤犁，禾生隴畝無東西。
- 20 況復秦兵耐苦戰，被驅不異犬與雞。
- 22 長者雖有問，役夫敢申恨。且如今年冬，未休關西卒。
- 26 縣官急索租，租稅從何出。信知生男惡，反是生女好。
- 30 生女猶是嫁比鄰，生男埋沒隨百草。君不見青海頭，古來白骨無人收。
- 34 新鬼煩冤舊鬼哭，天陰雨溼聲啾啾。

『全唐詩』卷二二六

現行の教科書（右は明治書院のもの）

桐原…読解 「役夫敢申恨」には、どのような心情が込められているか、説明してみよう。

発展 作者にはどのような動機からこの詩を作ったと考え荒れるか、歴史的背景を踏まえて話し合ってみよう。

明治…言語活動 「兵車行」の詩について、杜甫が訴えようとしたことをかんがえてみよう。また、杜甫が置かれている社会状況についても調べてみよう。

◎提案できること

■蟬聯体の多用と反復（リフレイン）に着目■

蟬聯体

●「哭」「哭声」（6・7） ●「問行人」「行人但云」（8・9）

反復

●「君不聞」（16）「君不見」（32） ●「生男」（28・31）「生女」（29・30）  
●「新鬼」「旧鬼」（34）

数字の使い方の工夫

●「十五」「四十」（10・11） ●「千村」「万落」（17）

問…なぜ近体詩は同一の文字を使わないのを原則とするのか⇨修辭的な利点  
問…本詩における「反復」の効果は？

■地の文と会話文■

「行人但云点行頻」⇨語り手のことば

II これまでの古詩教材―現代の教材としての再提案

i 教材としての「贈衛八処士」再考 長い作品の例として

- 1 人生不相見，動如參與商。今夕復何夕，共此燈燭光。
- 5 少壯能幾時，鬢髮各已蒼。訪舊半為鬼，驚呼熱中腸。
- 9 焉知二十載，重上君子堂。昔別君未婚，兒女忽成行。
- 13 怡然敬父執，問我來何方。問答乃未已，兒女羅酒漿。
- 17 夜雨翦春韭，新炊間黃粱。主稱會面難，一舉累十觴。
- 21 十觴亦不醉，感子故意長。明日隔山岳，世事兩茫茫。

『全唐詩』卷二二六

大修館書店（『高等学校 漢文 改訂版』一九八五年）学習のてびきⅡ友人に対する情愛がどのように歌われているか、話し合ってみよう

◎提案できること

■代名詞■

友人Ⅱ「君」（11）「主」（19）「子」（22） ↓ 杜甫Ⅱ「我」（14）

■直接話法■

●衛氏の子どもの問いかけ「問我來何方」（15）

●衛氏の呼びかけ「主稱會面難、一舉累十觴」（19・20）

■衛氏の子どもと時間の経過■

「焉知二十載」（9）

↓「昔別君未婚、兒女忽成行」（11・12）

子どもの様子

↓「問我來何方、問答未及已、驅兒羅酒漿」（14・15・16）

■酒宴の様子■

●「酒漿」（16） ●「夜雨剪春韭」（17）Ⅱ季節もの、「新炊間黃粱」（18）Ⅱたきたて

資料 高島俊男『李白と杜甫』三〇二頁（講談社学術文庫、一九九七年）

中国の詩に歌われる人間関係の、最も主要なテーマは男同士の友情である。友情を歌った詩は古来数限りない。しかしそれらは多く宴席や別れの場でのそれであって、この詩のような情景のなかでそれが歌われたことはなかった。あのころ君はまだ未婚だったが、おやまあこんな子どもたちが、といったような詩句も従来の詩にはなかったところである。日常生活のありさまを詩にする、ということは、宋代以降多く見られるようになるが、これも杜甫によって先鞭をつけられた分野の一つであった。しかしこの詩のばあい、ささやかな一家のつつましい幸福が、平和な社会の上に安定しているのではなく、それをいつ突きくずすかわからない動乱の時代のなかで、あやうい綱渡りのようにかろうじて保たれているという事情が、いつそうこの一家の情景を美しく貴重なものにしているのである。

李白が夢みた幸福、それは晴れがましい衣冠をつけ駿馬にまたがって朝廷より退出し、家にもどれば庭に七十羽の紫鷺鷥がたわむれ、珍羞を前に趙舞齊謳をたのしむ高官の豪華な生活であった。それが、庶民の家に生まれ、開元天宝の盛時に生涯の大半をすごした李白の最も望ましい生活だったのである。

それに対して、安史の乱の動乱の渦中で辛酸をなめつくした杜甫にとって最も貴重に思われたのは、戦争の惨禍のない平和な社会と、その中での平凡ながらつつましく幸せな家庭であった。杜甫はそれを自分自身の身の上に望んだのみならず、天下のすべての人々の身の上にそれがおとずれることを祈念した。けれどもそれは、杜甫の身の上にも、天下の大多数の人々の身の上にもおとずれず、戦いはあくことなく続き、多くの家庭の小さな幸福を破壊しつづけた。だから杜甫は生涯「腸を熱く」して慷慨し、歌いつづけねばならなかったのである。

ii 教材としての「羌邨」再考―短い作品の例として

- 1 崢嶸赤雲西，日腳下平地。柴門鳥雀噪，歸客千里至。
- 4 妻孥怪我在，驚定還拭淚。世亂遭飄蕩，生還偶然遂。
- 9 鄰人滿牆頭，感歎亦歔歔。夜闌更秉燭，相對如夢寐。

『全唐詩』卷二二七

\* 本詩の主題は戦時下における家族との再会の喜び  
◎ 提案できること

■ 古体詩と近体詩との比較

近体詩のきまりは頷聯・頸聯の対句 杜甫：「春望」首聯・頷聯・頸聯は対句

「羌邨」は

● 全聯が散句

● 「還」(6)、「亦」(10)、「更」(11)といった散文的な助字の活用。

↓ どのような解釈ができるか。

### III 杜甫の古詩が持つ教材としての可能性

i 比較教材としての可能性①―日本古典文学との比較

例：子どもの捉え方の比較―憶良のうたとの比較

資料：川合康三「山上憶良と中国の詩」(『中国古典文学の存亡』研文出版社、二〇二三年)

そして憶良の歌には周知のとおり、子供がしばしば登場する。原田貞義氏によれば、「二十九歌群中、十二歌群」に子供を詠み込んでいるという。陶淵明・杜甫と同じように、憶良における子供の類出は日本の文学においても目新しいものであったのだろうか。

802 子等を思ひし歌一首 序を并せたり

瓜食めば子ども思ほゆ 栗食めばまして偲はゆ いくより来りしものそまなかひにもとな  
かかりて安寐しなさぬ

「序」では釈迦ですら「子を愛する心有り。況むや、世間の蒼生、誰か子を愛せざらめや」と、子供への愛が人として止むに止まれぬ自然の感情であることを記す。弁解めいたこの「序」の背後には、子への愛情も煩惱の一つに数える仏教の教えがあり、憶良はそれを敢えて振り切って、子への思いを奔出させる。子への愛情を煩惱とする抑制は、陶淵明・杜甫には見られない。したがって憶良のように子供への愛情は人の必然であることさらに語ることもない。「瓜食めば」の歌がうたうのは、理を越えて湧き起こる子への思いである。わけもなく生ずる愛、それは人として自然の情であると憶良は言いたいかに思われる。

つとに契沖『代匠記』が指摘したように、この歌の「瓜」「栗」は即座に陶淵明「子を責む」詩を想起させる。「通子(陶淵明の末子の名)は九齡に垂んとするに、但だ梨と栗とを覓むのみ」。憶良の「瓜」「栗」と陶淵明「子を責む」詩の「梨」「栗」、この強い結びつきを思えば、語彙のレベルでも陶淵明との類縁を認めざるを得ない。

対象作品「贈衛八処士」「羌邨」

ii 比較教材としての可能性②—日本近代文学との比較  
 例・森鷗外『うた日記』所収「罌粟、人糞」（未延芳晴『森鷗外と日清・日露戦争』平凡社、二〇〇八年）

「罌粟、人糞」——レイプされた少女の悲劇を見つめた長詩

日露戦争終結から百余年、二十世紀を通していくつもの戦争の「悪」と悲惨な結果を見て知ってしまつた現代の人間として、私たちは、『うた日記』という文学史上おそろく類を見ない戦争詩歌集を通して、文学者森鷗外が、戦争とどう対峙し、どう書いたか検証してきたわけだが、読み進むにつれて次第に大きくなってくる疑問の一つは、このように個人に対して国家を優先させ、「私」を「公」、あるいは「官」に従属・同化させた人間（鷗外）に、戦争そのものもたらす悲惨・不条理な現実を見据え、その本質的「悪」を見抜き、撃つことが果たしてできるのかという疑問である。

事実、これまでに見てきたように、長詩・長歌のほとんどは第二軍軍医部長、あるいは自任従軍歌人として詠まれた公的抒情・叙事・叙景詩で占められており、それが鷗外をして戦争の現実を見つめ、直接的かつ十全に対峙することを阻害していることは、これまでたびたび指摘してきた通りである。そうしたなかで、唯一例外的に戦争の「悪」を正面から見据えた作品として注目されるのが、七月十三日、古家子で詠んだ「罌粟、人糞」というショッキングなタイトルが付けられた詩である。

わが住む	室せばく	恥見て	生きんより
顔ばな	照れるかくさん	散際	いさぎよかれと
すべなく	うたて見られぬ	花罌粟	さはに食べつ
紐は黄	袴朱	たらちね	かくと知り
仇見る	てだてに慣れて	吐かすと	のませたまひし
をみなご	たやすく見出でつ	人屎	験なかりき
ますらを	涙なく	おもなく	羞ぢ伏すを
辞めど	きかんとはせで	舌人	聞きて告ぐれば
あす来と	契りてゆきぬ	吐くべき	薬とらせつ
		間近き	たたかひの
		場行く	死の使の
		打見て	過ぎし花罌粟

(中略)

歌の大意は、こうだ。——逃げ遅れた村娘が、兵士に見つけられレイプされた。娘は恥を曝して生きていくよりは、と罌粟の花を大量に食べ自殺を図るが、死に切れない。母親がそれを見つけ、罌粟を吐かせようと人糞を食べさせるが、吐けない。そこで通訳から軍医の鷗外に知らせが入り、催吐薬を飲ませてやるというものである。

そしておそらく、鷗外は、村娘を犯した犯人が日本兵であることを知っていた。しかし、皇軍兵士が性的暴行を働いたことを、あからさまに公にすることはできなかった。そのため、わかる人にはわかるという形で、「紐は黄 袴朱」という一行を書き入れたのではないだろうか。

戦争がもたらす悲劇……。それも被害者は、戦争とは本来関係のない現地中国人の村娘である。ここで鷗外は、一人の文学者として、戦争の「悪」をひたすら見据えている。しかし、それ以上どうすることもできず、戦争の「悪」を撃ち指弾する声を上げることができないまま、娘を置いて去るしかなかった。軍医部長としての森林太郎が、鷗外にそれをするを禁じているからである。鷗外はこのときもまた、軍医部長森林太郎と文学者森鷗外を両立させたままで、言葉によって戦争と向かい合うことのぎりぎりの限界点に立っていた。そして、軍医部長であり続けながら戦争の「悪」を暴き、糾弾することをひそかに断念したはずである。

対象作品「石壕吏」「兵車行」

資料…（鈴木修次「報道の詩」『唐詩 その伝達の場』日本放送出版協会、一九七六年）

杜甫はこの詩において、よけいな感想をつらねることをせず、事実のみを凝縮させてのべ、そして終わっている。そのようにしてかえって、言外の余韻を強くただよわせたのであった。この時点における杜甫の心情は、あまりにもひどい事態だ、という一語につきたであろう。もはや杜甫は、体制のやり方を擁護すべくもない。ただただ絶句するのみであった。

「新安吏」は、二十八句、「潼関吏」は、二〇句、「石壕吏」は、二十四句。この三篇のくみあわせには、劇的効果を予想した構成がある。地理的にいって、もし華州から洛陽にのぼったときの見聞ならば、潼関↓石壕↓新安とならぶべきであり、洛陽から華州への帰途の見聞ならば、その逆になるべきである。時間的に考えるならば、「石壕吏」のはなしが「新安吏」のはなしの前に置かれた方がむしろふさわしい。歴史的事実を追うならば、乾元二年三月、郭子儀が相州（鄴城）を攻略して大敗し、やむなく河陽に防禦態勢をとり、さらに洛陽にこもったのであるから。

しかしながら、連作としての劇的効果を考えるならば、やはり『杜工部集』（杜甫の詩集）の排列のように、「新安吏」「潼関吏」「石壕吏」の順序でなければならぬ。そうしてこそはじめて、詩人の発言の姿勢の変化と深まりとが見られるのである。詩人の眼が、しだいに体制から離れてゆくそこどころに、この連作の構成があるのである。

資料…『筑摩書房版 古典探究 学習指導の研究』担当…樋口泰裕

ることになる読み手の能動的な解釈によって埋められるのである。また、「新安吏」では、母親がひよわな息子たちを戰場へ送り出す悲劇的な場面に遭遇して「自づから眼をして枯れしむること莫かれ／汝が涙の縦横なるを収めよ」と激情をもって呼びかけ、また「行を送りて血に泣くこと勿かれ／僕射は父兄のごとし」と激励しつつ慰めのことばをかけ、あるいは「潼関吏」では反乱軍に備えて城塞を補修する兵士たちに向けて「哀しい哉 桃林の戦／百万化して魚と為る／請ふ 防関の將に囑せん／慎みて哥舒を学ぶこと勿かれ」と、少し前の官軍の敗北を怨み悲しみながら自らの願いを大きな声で託していたのであるが、本詩では、そのような当地のようすを見聞した上で語り手が能動的に考えたこと、感じたことを発露するようなことも一切ない。この「空白」もまた全く読み手の自発的な感傷・感動に委ねられるのである。この語り方にこそ、このうたの表現力がある。うたの中で語られる一つ一つの事柄・事実は、確かに読む者に真実として迫ってくる。ただ、その迫力は語られていること自体にのみ求めるべきではない。むしろ、語られない「空白」によって、語られている事実を浮き彫りにすることで、詩の内容を真実のものとして読む者の心に印象深く焼き付けるのである。現在の戦争がもたらしている民衆の悲惨・絶望、そして社会の矛盾・残酷を前に、詩人は絶句せざるを得なかったのである。そのような詩の現場に立ってしまった詩人にとって自分が為すべきことは、解釈の言をたやすく連ね、感慨の情をみだりに表出するのではなく、敢えてそれらを抑制し、せめて己の目に映り、己の耳

に入る紛れもない事実の「一つ一つを積み上げていくことだった。詩人は眼前の事実を淡々と並べているのは決してない。一つ一つに胸を詰まらせながら、重い筆を動かしているから。いわばこの「空白」には詩人の絶句・無念の沈黙がはちきれんばかりに詰まっている。そうして生まれた「空白」が、一つ一つの事実を際立たせ、一言一句に緊張関係をもたらし、ひいては詩の世界に民衆の苦悩、社会の矛盾、戦争の悲惨という真実を滲ませているのである。滲み出る真実には、何万言を費やそうとも語り尽くせない詩人の無念が凝縮されているのである。

まとめ

- 平和教材としての杜甫の古詩―日常の尊さ 非日常からのアプローチへ
- 過去の教材の再考と再提案 『李白と杜甫―唐詩のこころ―』（三省堂、一九七四年）

\* 研究はJSPS 科研費「杜甫散文研究（21K00321）」の助成を受けたものです。